

ウェルギリウス『アエネーイス』第1歌（訳）

古川, 琢磨
九州大学附属図書館

<https://hdl.handle.net/2324/4400032>

出版情報 : pp. 1-28, 2021-05-08
バージョン :
権利関係 :

ウェルギリウス『アエネーイス』

第1歌

古川 琢磨 訳

戦と男を歌おう。トロイアの岸から初めて
イタリアへ天命のため逃れラウィニウムの浜へ到り
天の暴威で陸でも海でも大いに苦しんだのは
苛烈なユーノーの解けぬ怒りのため

5 戦による多事をも蒙り、やがて都市を創り
神々をラティウムに移す者を。ここから成るは
ラテンの民とアルバの父祖とローマの高き城壁。

ムーサよ、わけを語れ。何の権能が害され
何を恨んで神々の女王が敬虔に優れる男を

10 これほどの災禍を経るよう、これほどの労苦を受けるよう
追い立てたか。神々の心にこれほどの怒りが？

ティルス of 植民者が治めた古き都市は
カルタゴで、イタリアとティベリスの河口を彼方に望み
財は豊かで戦意があって粗野で

15 この都市一つをユーノーが他のどの国よりも
サモスが霞むほど重んじたと言われ、ここに女神の武具が
ここに戦車があり、女神はここが諸族の王たるよう
天命の許す限り、絶えず気にかけて育んだ。

しかし実はトロイアの血を引いてティルスの城壁を
20 いつか覆す末裔が導かれると聞いていた。

今後諸族を統べる王となって戦に勝ち誇り
リビュアを滅すべく現れる、と運神が定めたと。
これを恐れるサトゥルヌスの娘が思い出すは古戦
愛しのアルゴス人のためにトロイアと初めて戦い
25 怒りのわけと苛烈な苦痛は未だ
胸から離れず、心の底に留めるは
パリスの審判の記憶と見目を軽んじられた侮辱と
憎き民族と攫われたガニューメデスの栄誉。
これらに燃えて海原で遍く投げ出された
30 トロイア人を、ダナイ人や無情のアキレウスからの生還者を
ラティウムから久しく遠ざけた。長年の間
天命に追われて四方を海に囲まれ彷徨っていた。
ローマの民を創るのはこれほどの困難だった。
シキリアの地からほぼ見えぬ遠い沖まで
35 一行が嬉々と出航して潮の泡を青銅で掻き分けていて
その時ユーノーはかの傷を絶えず胸の底に抱いていた。
「我が負けて企てを諦め
イタリアからテウクリア人の王を遠ざけられぬか？
確かに天命に阻まれている。パラスは
40 アルゴスの船団を焼き払って大海に沈められたか
オイレウスのアイアス独りの悪事と狂乱のために？
自らユピテルの迸る雷火を雲から投げ放ち
船団を砕いて風で海を掻き回し
胸を貫かれて火を吐く男を
45 旋風で攫って鋭い岩礁に刺し留めた。
対して我は、神々の女王でユピテルの姉かつ妻として歩み
これほどの年月の間ただ一つの民族と
戦っている。今後は誰がユーノーの神威を信じ
跪いて祭壇で犠牲を捧げようか？」
50 女神は燃える心でこう考えつつ

嵐雲の祖国、吹き荒ぶ南風に満ちた地
アエオリアへ到る。ここでは広い洞窟で王アエオルスが
競り合う風と鳴り響く嵐を
王権で押さえて鎖と牢で制御している。

- 55 風は山の大きな唸りと共に憤慨し
門を囲んで喚き、アエオルスは高い砦に座し
王笏を執って情熱を静めて怒りを和らげる。
そうせねば、海も陸も高い空をも
激しく奪って天の彼方へ吹き飛ばそう。
- 60 しかし全能の父神は恐れて風を黒い洞窟の中に
覆い隠し、その上に重く高い山を据え
王を置いた。確たる法の下で
命じられて手綱を締めては緩める術を心得る者を。
その王にユーノーは願って言う。

- 65 「アエオルスよ、確か神の父かつ人の王が
風で波を静めては逆立てるのを許した者よ
我が敵たる民族がティレニア海を渡り
イリオスの敗れた守護神をイタリアへ運んでいる。
風に力を吹き込んで船を沈めて押し潰し
70 散った者らを海に追い込み打ち砕け。

- 我には容姿の秀でたニンフが七の二倍いて
その中で最も見目麗しいデイオペアと
確たる縁を結ばせ、なれのものとし
この功勞によりニンフは生涯なれと
75 過ごして麗しい子を成してなれを親としよう」

- アエオルスはこれに対し「おお女神よ
お望み事を探すがあなたの仕事、命を受けるが我が領分。
この王国の全てを、王笏とユピテルの加護を
くださり、神々の宴への列座を許され
80 雨雲と嵐を統べる力をくださる」

こう言って、槍を逆向けて窪んだ山の
横腹を打つと、風は隊列を組むかのように
門に向かって奔り、渦巻いて地を吹き抜く。
海にのしかかって全てを奥の底から
85 共に掻き出す東と南と暴雨で満ちた
南西の風が、大勢の果てなき波を浜へ押し出し
兵士の叫びと帆綱の軋みが後を追う。
突如雲が空と昼をテウクリア人の眼から奪い
黒い夜が大海に垂れ下がる。
90 天は轟いて大気は雷火に満ちて輝き
全てが兵士に目前の死を予示する。
直ちにアエネーアスの四肢は凍えて脱力し
呻いて両手を天に差し出し
こう言い語る。「おお三倍も四倍も幸ある者らよ
95 父祖の面前、トロイアの高き城壁の下で
死に至った者らよ！ おおダナイの民族で最も勇猛な
テューデウスの子よ！ わたしはイリオスの平野で死ねず
その右手でこの息は絶えなかったか？
彼の地でアキレウスの槍に苛烈なヘクトルが、強靱な
100 サルペドンが倒れ、シモイスが水の底で数多の兵士の
盾と兜と勇猛な身体を捕らえて流し去る！」
こう叫ぶ間に北風と共に唸る嵐が
帆を逆から叩き打ち、波を天まで逆立てる。
櫂は砕かれ、船首は逸れて波に
105 脇腹を曝け出し、険しい水の山が積み重なって追い撃つ。
波の頂から吊るされる者、海が割れて
大地を波間に現し、砂混じりの大波が荒れるのを見る者。
三隻を南風が攫って投げつける先は隠れた岩
波間の岩をイタリア人は祭壇と呼ぶが
110 巨大な背が海上にあり、三隻を東風が沖から

浅瀬と砂洲へ押しやり、見るも無残

浅瀬にぶつけて砂の塚で包み込む。

リュキア人と忠実なオロンテスを乗せた一隻を

男の眼前で頭上から大波が

115 その船尾を叩き打ち、舵取りが前のめりに投げ出され

頭から転げ落ちれば、船を三度波がその場で

取り巻いて掻き回して激しい渦が海に呑み込む。

見える、まばらに漂う者らが果てなき渦の中に

兵の武具と船板とトロイアの宝物が波の狭間に。

120 今やイリオネウスの頑丈な船を、勇猛なアカテスの船を、

アバスが乗った船をも、老アレテスの船をも、

嵐は征し、側面の継ぎ目が緩んでどの船も

敵たる水流を受け入れて亀裂が広がりゆく。

その間に轟音を伴う海の荒れ様と

125 放たれし嵐と海の底からの泥水の噴出を感知した

ネプトゥーヌスは、激しく苛立ち、彼方を

見渡すべく穏やかな頭を水面から出した。

海全体で粉碎されたアエネーアスの船団を

大波と空の崩落に押し潰されたトロイア人を見て

130 ユーノーの策略と怒りは兄弟に見過ごされなかった。

東西の風を呼び付け、直ちにこう言う。

「血筋へのこれほどの自信がなれらを捉えたか？

風よ、今まで天と地を我が意志なく

荒らしてこれほどの困難を敢えて起こすか？

135 なれらを我は、いや荒ぶる波を鎮めるのが先

その後類なき罰で罪を償わせよう。

急ぎ飛び去ってなれらの王にこう述べよ。

海原の支配と苛烈な三叉槍はあれにではなく

我に籤で与えられた。あれが続べるは巨大な岩

140 東風よ、なれの家。アエオルスはあの宮殿で身を誇示し

風の閉ざされた牢獄に君臨すべし」

この言葉より早く膨れた海を鎮め
集った雲を追い払って太陽を取り戻す。

キュモトエとトリトンが共に尽力して尖った

145 岩礁から船を押し出し、自らは三叉槍で持ち上げ
果てなき砂洲を開いて海を抑え
軽快な戦車で水面を滑りゆく。

例えば数多の民衆の中で度々争いが起こり
心が卑しい大衆が荒れ狂い

150 今まさに松明と石が飛び、狂気が武器を手渡すが
その時、敬虔と勲功のために尊ばれる男を偶然に
目にすれば、静まって耳を立てて直立し
男は言葉で心を統べて胸を静める。

そのように海原全ての轟きが弱まった。その時海を

155 父神は見渡して晴れ渡った空に乗り入れ
馬を駆って従う戦車に鞭を与えて飛ぶ。

疲れ果てたアエネーアスらは最寄りの浜を
急いで探し、リビュアの岸へ向かう。

長く奥まった場所があり、島が港を

160 両脇を突き出して作り、そこで沖からの全ての
波が砕かれて引き込まれた入り江へ分かれていく。

両側から果てなき岩壁と双子の崖が
空へ聳え、その頂の下に広く

海が穏やかに静まり、それから背後は揺れる木々が

165 上にあり、恐ろしい影を持つ黒い森が張り出る。

真正面には崖が垂れてできた洞窟

その中には澄んだ泉と天然の石の椅子

ニンフの家。ここでは疲れた船団を綱は
留めず、錨は鉤で引っかけて繋がない。

170 ここへアエネーアスは全団のうち数えて七隻の船で

入り、激しい陸恋しさと共に
上陸したトロイア人は待望の砂浜を得て
塩水に浸った四肢を浜辺に置く。
すぐに火打石で火花を打ったアカテスは
175 木の葉で火を受けて周りに乾いた
燃料を置いて焚き付けの中で火をつけた。
次に波で傷んだ穀物と挽臼を
万事に疲れた皆が用意し、救い上げた穀物を
火で焙って石で挽く準備をする。
180 アエネーアスはその間に岩山を登り
海原に見える全てを広く追う。
風に飛ばされたアンテウスやプリュギアの二段櫂船や
カピュスや高い船尾にカイクスの武具は見えるかと。
視界に船なく、浜辺に流離う三頭の鹿を
185 見て、それらに群れの全てが背後から従い
長い列が谷に沿って草を食む。
ここに立ち止まって手で掴んだ弓と速い矢は
忠実なアカテスが携えてきた飛具で
まず枝角のある高い頭を動かす導き手を
190 倒し、次いで群れの全てを
混乱させて飛具で葉の茂る森の中へ群れを追い
勝者は七頭の巨大な身体を土に打ち倒し
数を船と等しくするまで退かず。
この後港へ向かって全ての仲間に分け与える。
195 それから善良なアケステスがトリナクリアの浜で甕に詰め
去り行く者らに気前よく与えた葡萄酒を
分かち、悲しむ者らの心を言葉で慰める。
「おお皆、我らはこれまで不幸を知らずにはおらず
より重きを蒙る者らよ、神もこれに終わりを与えよう。
200 なれらは凶暴なスキュラへも底から鳴り響く

- 岩礁へも近づき、キュクロプスの岩山も
経験した。勇気を呼び戻して悲しい恐れを
振り払え、あるいはいつかこれを思い出して喜ぶだろう。
様々な不幸を、これほどの苦境を越え
- 205 我らが目指すはラティウム、安住の地だと天命が
示し、そこにトロイアの王国が再興するのが神意だ。
耐えよ、順境のために自身を守れ」
こう語り言って激しい不安に苦悩し
顔には希望を装い、深き嘆きを心に押し込む。
- 210 一行は獲物と未来の食事を準備し
皮を脇腹から剥いで肉を剥き出し
細かに切って震える肉を串に刺す者あれば
浜辺に鍋を置いて火をつける者も。
それから食事で力を回復し、草の間に身を伸ばし
- 215 熟成した葡萄酒と肥えた鹿肉で満ち足りる。
飢えが料理で追い払われて食卓が片付くと
長い会話で離れた仲間を惜しみ
希望と恐怖の間で惑う。生きていようと信じるか
最期を迎えてもう呼ばれても聞こえぬと考えるかで。
- 220 特に敬虔なアエネーアスは時には勇壮なオロンテスの、
時にはアミュクスの災禍とリュクスの残酷な定めと
勇猛なギュアスと勇猛なクロアントゥスを嘆く。
さてそれが終わる時、ユピテルが至天から
見渡すは帆走る海や横たわる陸と
- 225 海辺と散住する民で、空の頂に
立ってリビュアの王国に眼を据えた。
これほどの憂慮を胸中で巡らす神に対し
悲しんで輝く眼を涙で満たす
ウェヌスが語りかける。「おお人界も神界も
- 230 永遠の命令で支配して雷霆で威圧する方よ

我がアエネーアスやトロイア人があなたに
どれほどの罪を犯し得て、これほどの死を蒙り
全世界がイタリアの前で立ち塞がるのか？
確かここからいずれ歳月が巡ってローマ人の
235 導き手となり、テウクロスの再興した血統から
海を、全地を配下に収めようと
約束された。父よ、どんな考えがあなたを変えた？
これでわたしはトロイアの落日と悲しき破滅を
天命と反対の天命を釣り合わせて慰めとしてきて
240 今も同じ運命がこれほどの災禍に悩む男らを
追いかける。偉大なる王よ、労苦にどんな終わりを与えるか？
アンテノルはアカイア人の只中から逃れ
イリュリア人の領地と奥地のリブルニ人の王国を
無事に通過してティマウスの水源を渡れた。
245 そこから川は九つの口を通って山の果てなき唸りと共に
噴き出す海のように流れて轟く海原のように平地を圧する。
ここに彼は都市パタウィウムとテウクリア人の住処を置き
民族に名を与えてトロイアの武具を吊り掲げ
今は穏やかな平和の中で落ち着いて静かに暮らし
250 我ら、あなたの子孫は、空の城を約束され
一人の怒りのために恐ろしいことに船が失われ
裏切られてイタリアの岸から遠く離されている。
これが敬虔の報いか？ こうして我らを王笏へ戻すのか？」
人と神の創り手は微笑みかけ
255 空と嵐を晴らす顔で
娘に口づけをし、続けてこう語る。
「不安を抑えよ、キュテラ神よ、なれらの天命は不動のまま。
なれは都市ラウィニウムと約束された城壁を識り
空の星の下へ心大きいアエネーアスを
260 高々と引き上げよう。考えは我を変えぬ。

この男は、この不安がなれを苛むから語り
より長く、天命の秘を紐解いて解き明かすが
イタリアで大戦を起こして猛々しい諸族を
征服して掟と城市を民のために築こう。

265 三度目の夏がラティウムでの君臨を見つめ
三つの冬がルトゥリ人を制してから過ぎるまでに。
息子アスカニウスは、今はユールスという呼び名が
つけられ、イリオスの国が盤石の間はイールスだったが
三十年の大いなる歳月の円環を

270 支配で満たし、王権を都のラウイニウムから
移し、多大な力でアルバ・ロンガを築こう。
ここはやがて三百年間ヘクトルの民族に続べられ
その後王家の巫女イリアが
マルスの手で身籠り双子を産もう。

275 それから乳母の雌狼の褐色の毛皮を喜ぶ
ロムルスが血統を引き継いでマルスの城市を創り
自らの名にちなんで民をローマ人と呼ぼう。
彼らに我は国の境も時限も定めず
支配を無限に授けた。残酷なユーノーも

280 今は海と地と空を恐怖で疲弊させるが
意向を良い方へ戻し、我と共に
ローマ人を、世界の覇者かつトガの民を慈しもう。
こう定まった。月日が流れて時代が来て
アッサラコスの家系がプティアと有名なミュケーナイを
285 従属させて敗れたギリシャに君臨しよう。

高貴な血筋からトロイア人のカエサルが生まれよう
支配を大洋で、名声を星々で区切るに至り
偉大なるユールスから名を引き継ぐユリウスが。
なれはいずれ空に東方の戦利品で満ちたこの男を
290 安らかに迎え、男も祈りにて名を唱えられよう。

その時戦が終わり荒れた世は静まり
白髪のアエネウスとウエスタ、弟レムスと共にクリリヌスが
法を布き、鉄と堅固な門で恐ろしい
戦の扉は閉ざされ、不敬な狂気が中で
295 苛烈な武具の上に座って百の青銅の結び目で
後ろ手に縛られて血濡れた口でおぞましく叫ぼう」
こう言ってマイアの息子を天から遣わすは
新しいカルタゴの大地と城が開いて
テウクリア人の歓待とし、天命知らぬディードーが
300 領土から閉め出さぬため。神は大空を
翼の権で飛んでリビュアの岸に急いで立った。
すぐに命を実行し、ポエニ人は猛々しい心を
神が望むままに捨て、何よりも女王は
テウクリア人への穏やかな心と寛大な精神を受け取る。
305 一方敬虔なアエネーアスは夜通し多事を思い
恵みの光が注ぐとすぐ、出立して未知の土地を
探索し、風でどこの岸に着いたのか
未開地を見たために住むのは人か獣かを
探って結果を仲間に報告しようと決める。
310 船団を窪んだ岩壁の下に森の弓なりの
木と鬱蒼な陰に周囲を遮られる形で
隠し、自らはアカテス一人を伴い
幅広い穂先の二本の槍を手に握って進む。
その眼前に女神が森の只中で姿を現し
315 乙女の顔と服とスパルタ娘のような武器を持ち
あるいはトラキアのハルパリュケが馬を疲れさせ
速いヘブルス川を駆けて追い越すかのよう。
というのも肩に習わし通りに手頃な弓を掛けた
女狩人は髪を風になびかせ
320 膝を露わにして流れる服ひだを結びまとめていた。

口火を切る。「やあ若者たちよ、教えて
見かけたかどうか。我が姉妹の誰かが丁度この辺りを
矢筒と斑の山猫の毛皮を着けて巡る姿を
あるいは泡吹く猪の走りを叫び追う姿を」

325 こうウェヌスが言い、ウェヌスの息子が応えてこう始める。

「あなたの姉妹は聞きも見もせず
おおあなたを何と呼ぼうか、乙女よ？ 顔は人のものでなく
声は人の響きでなく、おおまさしく女神よ
ポエブスの妹か？ あるいはニンフの一族の一人か？

330 どなたであれ、恵み深く、我らの労苦を和らげ

一体どの空の下に、世界のどの岸に
投げ出されたかご教示を。人も場所も知らずに
彷徨って風と大波にここまで追われた。
数多の贅が壇前に我らの右手で置かれよう」

335 するとウェヌスは「わたしはこれほどの崇敬に値せず。

ティルスの乙女の習わしは矢筒を携え
紫の狩猟靴でふくらはぎを高く縛ること。
ポエニの王国、ティルス人とアゲノルの都市が見えるが
周囲はリビュアのもの、戦では不屈の民族。

340 支配をするのはティルスの都市を発ったディードー、

兄を逃れて。長い外法、長いは
くどいが、事の主なあらましを辿ろう。
彼女には夫シュカエウスがいてポエニ人の中で最も土地に富み
不幸者を大いに愛し

345 彼に父は乙女を与えて初の吉兆の日に結ばせた。

しかしティルスの王位を握っていたのは兄の
ピュグマリオン、他の誰よりも罪が深い。
二人の間に割り来る狂気。あの不敬者は
壇前で財への愛に目が眩み

350 密かに剣で丸腰のシュカエウスを討ち、妹の愛に無関心で

- 所業を長く隠して心痛の恋人に対し
邪悪にも多事をでっち上げ虚ろな希望で欺いた。
しかし眠りの中に未葬の夫本人の霊が現れ
驚くほど青ざめた顔を上げ
- 355 悲惨な祭壇と剣で貫かれた胸を
露わにし、一家の全ての隠された不幸を暴いた。
それから急いで逃げて祖国から離れよと説き
旅の助けとして地中から掘り出すは
古来の宝物、未知の銀と金の塊。
- 360 これらに驚いたデュードローは亡命と仲間を準備した。
集う者らには暴君への容赦ない憎悪や
激しい恐れがあり、偶然に支度済みの船を
奪って黄金を積み込む。強欲な
ピュグマリオンの富は海を渡り、行為の指揮者は女。
- 365 着いた地は今あなたが巨大な城壁と
新しいカルタゴの聳える城を見るであろう所で
買った土地は、出来事の名に因むビュルサで
牡牛の皮で取り囲めるほどだった。
ところであなた方は一体どなた？ どの岸から来た？
- 370 どこへ向かうか？」こう問う者に彼は
嘆息して胸の底から声を引き出す。
「おお女神よ、たとえ最初の発端から辿って進み
我らの労苦の年月を聞く時間があるとしても
途中で天が閉じて宵の明星が昼を眠らせよう。
- 375 我らは古きトロイアから、もし偶然にあなた方の耳を
トロイアの名が通ったなら、様々な海を渡った我らを
気まぐれに嵐がリビュアの岸に連れて来た。
わたしは敬虔なアエネーアス、敵から奪った守護神を
連れて船団で運び、名声は空の上に知れ渡る。
- 380 祖国となるイタリアを求め、一族は至高のユピテルが源。

十の二倍の船と共にプリュギアの海へ乗り出し
女神たる母に道を示されて賜った天命に従い
辛くも波と風で壊れた七隻が生き残る。

人知れず、困窮し、リビュアの砂漠を放浪し

385 欧州と亜州から追われた」これ以上訴えるのを
許さずウェヌスは嘆きの間にこう挟み言う。

「あなたがどなたでも、思うに、神々に見放されず
命の風を受けている。ティルス之都に到ったから。
すぐに進んでここから女王の館に行け。

390 確かに告げよう、仲間は帰還し、還った船は
北風が転じて安全な地へ導かれることを、
親が根拠なく偽りの予言術を教えたのでなければ。

見よ群れ成し楽しむ六の二倍の白鳥を
不幸にも天を滑る鷲が開けた空で

395 掻き乱していて、今は長い列で地上に
着くか着地をずっと見下ろすのが見られ
戻って来て翼を鳴らして遊び
集団で天を囲んで歌うのと

同様にあなたの船とあなたの若者らは

400 港に到るか帆を膨らませて港に入る。
すぐに進んで、道が導く方へ、歩みを向けよ」

言って身を翻して薔薇色のうなじが輝き
天上の髪は頭から神々しい香りを
吹かせ、衣は足の底まで垂れ

405 歩むにつれて真正の女神が顕れた。その時彼は母を
認めて立ち去る者へこう言って続ける。

「なぜ息子を幾度も、あなたも無慈悲だ、偽りの
姿で欺くのか？ なぜ右手に右手を合わせ
真正の声を聞いて答えるのが許されぬのか？」

410 こう責め立てて歩みを城壁に向ける。

対してウェヌスは歩く者らを暗い霧で包み
周囲に厚い雲の帳を女神は広げ
誰も彼らを見たり触れたり
邪魔を企てたり来訪のわけを問うたりできぬようにした。

415 自らは高々とパフォスへ発って住まいに嬉々と戻り
そこに神殿があり、百の祭壇がサバの
乳香で温まり新鮮な花輪で発香する。
彼らはその間に小道が示す方へ道を急いだ。
今まで登ってきた丘は、大きく都市に

420 張り出して向かいの城塞を上から見つめる。
アエネーアスが驚くはその大きさ、かつての小屋の集まりに
驚くは門と喧騒と舗道に。
熱心に働くティルス人、城壁を延ばし
城塞を築いて手で岩を転がし登る者

425 家のために土地を選んで溝で囲む者
法と官僚と聖なる元老院を選定する者。
こちらで港を掘る者あり、あちらで劇場の深い
基礎を据える者は、巨大な柱を
岩山から切り出し、高い装飾は未来の舞台のため。

430 例えば蜜蜂を初夏に花盛りの田園で
陽下で労働が動かす時、家族の育った
若蜂を連れ出す者、流れる蜜を
詰め込んで甘美な神酒で巣室を満たす者、
戻った蜂の荷物を受け取る者、作られた列で

435 怠ける群れの雄蜂を巣から遠ざける者があり
作業が白熱して芳しい蜜がタイムのように香るかのよう。
「おお幸いな、城壁がすでに聳える者らよ！」
アエネーアスは言って都市の城壁を仰ぐ。
語るも不思議、身を雲に包まれて

440 中を通り、人々の中に混ざって誰にも気付かれず。

都市の中心に神林があり、陰に富み
その場所で初めて波と嵐に苦しんだポエニ人が
掘り当てた印は、女王ユーノーが
示した、駿馬の頭で、このように確かに永久に
445 民族は戦に優れて暮らしは楽であろうと。
ここにユーノーのために大神殿をシドンのディードーは
創っていて、供物と女神の神威に富み
階段のある青銅の玄関が聳えて梁は青銅で接合され
青銅の扉で蝶番が軋っていた。
450 この神林で新外な光景が現れて初めて恐れを
静め、ここで初めてアエネーアスは救いの望みと
悲惨な事態での確信を強めた。
というのも大神殿の下で女王を待ちながら
各部を吟味する間に、どれほどの富が都にあるか
455 また細部に宿る画家の技と努力の成果に
驚く間に見る、一連のイリオスの戦列を
今や噂によって全世界に知れ渡る戦を
アトレウスの子とプリアモスと両者に苛烈なアキレウスを。
立ち止まって泣きながら語る。「今やどの地が、アカテスよ
460 大地のどこが我らの労苦で満ちまいか？
見よプリアモスだ。ここでも事績への報酬があり
出来事への涙があって心を儂さが打つ。
恐れを解け、この噂が何か救いをもたらそう」
こう言って心を実体なき絵画で養い
465 数多を嘆き、溢れる川で顔を濡らす。
というのも彼は見ていた。ペルガマの周りで戦いつつ
こちらでギリシャ人は逃げ、トロイアの若者らは追い
あちらにはプリュギア人、羽根兜のアキレウスが戦車で迫っていた。
そこから遠からぬ所にレーソスの白い布の天幕を
470 泣きながら見つける。寝入りを奇襲され

血に飢えたテューデウスの子が数多を殺して殲滅し
激した馬を自陣へ連れ去ったのは
トロイアの草を食んでクサントスの水を飲む前に。
別の箇所ではトロイロスが武器を失って逃げ
475 不運な少年でアキレウスと戦って敵わず
馬に引き摺られて空の戦車に仰向けでしがみつき
それでも手綱を握り、首も髪も土の上で引き摺られ
向きの変わった槍で砂地が刻まれる。
その間に好意なきパラスの神殿へ向かっていたのは
480 髪を振り乱したイリオスの女らで神衣を持って行き
嘆願し、悲しんで胸を掌で打ち
女神は背を向け地面に眼を据えていた。
三度イリオスの城壁の周りでヘクトルを引き摺り
黄金に換えて息絶えた骸を売っていたアキレウス。
485 まさにその時大きな嘆息を胸の底に抱き
略奪品を、戦車を、友の骸そのものを
そして武器のない両手を伸ばすプリアモスを見た。
更に見つけたのはアカイアの将らと乱戦する自身と
東方の軍勢と黒きメムノンの武具。
490 三日月型の盾を持つアマゾーンの一軍を率いる
ペンテシレイアは荒ぶって数千人の中で燃え上がり
黄金の帯を露わな乳房の下に締める
女戦士、男たちとの戦いを望む乙女。
これらがダルダノスのアエネーアスには驚くべきものに見え
495 呆然として一点を見つめ釘付けになって留まる間に
女王が神殿へ、最も見目麗しいディードーが
若者らの大集団に取り巻かれて歩いて来た。
例えばエウロタスの川辺であるいはキュントスの尾根に沿って
ディアーナが合唱隊を鍛え、無数の
500 山精が従ってあちこちから集まり、彼女は矢筒を

肩に掛けて歩みは全ての女神を凌ぎ
ラトナの黙する胸を喜びが揺り動かす。
そのような姿がディードーで、嬉々と人の間へ身を運び
務めと未来の統治に取り組んでいる。

505 その時女神の扉の所、神殿の丸屋根の中心で
兵隊に守られつつ高い玉座にもたれて座った。
法と法律を民に布き、労働の務めを
公平に割り当てるか籤で導き出していて
その時突如アエネーアスが見るは大勢の群衆に近づく
510 アンテウスとセルゲストゥスと勇猛なクロアントゥスと
他のテウクリア人で、黒い嵐が海原で
打ち散らして遠く別の岸へ攫っていた。

自らは仰天し、アカテスも喜びと恐怖で打ち震え
右手を交わすのを熱望して
515 燃え上がっていたが、未知の事態が心を惑わす。
抑心して空洞の雲の帳の中で見張るのは
男らにどんな運命が、船をどの浜に置いているか、
なぜ来ているかで、確かに全ての船から選ばれた者らが
好意を乞うて来て神殿へ叫びと共に向かっていた。

520 入ってから対面で話す機会が与えられ
最年長のイリオネウスが穏やかな心でこう始める。
「おお女王よ、ユピテルが新しい都市の創建と
正義による傲慢な諸族の制御を許した方よ
あなたに、風であらゆる海へ流された不幸なトロイア人が
525 願う、恐ろしい火を船から遠ざけ
敬虔な民族に配慮して近くで我らの事情を見てくれ。
我らは剣でリビュアの家々を荒らしたり
奪った戦利品を浜へ運んだりするために来ておらず
力も大きな傲慢も敗者の心になし。

530 ギリシャ人がヘスペリアの名で呼ぶ地があり

古の土地で、戦争に強く土は肥沃で
オエノトリアの人々が昔住み、今は噂では子孫が
君主の名に因み国土をイタリアと呼ぶ。

そこへ渡り

- 535 その時突如波を従えて昇っている嵐呼ぶオリオンが
暗い浅瀬へ連れ去って遠くまで厚顔な南風と共に
うねりが高まる中で波と道なき岩の間に
追い散らし、少数がこのあなた方の岸へ泳ぎ着いた。
この民族はどんな人間か？ どんな野蛮な国がこの慣習を
- 540 このように許すのか？ 砂浜の歓待はなく
戦を起こして最初の陸地に立つのを禁じる。
たとえ人間的な民族と人の力を軽んじても
正しきと悪しきを心留する神々を恃まれよ。
我らの王はアエネーアス、敬虔において並ぶ者
- 545 戦争と武器において勝る者はなかった。
もしこの男を天命が救えば、もし天上の風を受け
残酷な影府でまだ死横していなければ
恐れはなく、先んじる親切の競争はあなたを
後悔させず。シキリアの地にあるは都市と
- 550 武器、トロイアの血を引く名高いアケステス。
風で壊れた船を陸上げし
森で木材を調達して櫂を削るのを許されたい
もし仲間と王が戻って来てイタリア行きを認められたら
喜んでイタリアとラティウムへ向かおうが
- 555 もし救いが尽き、あなたを、テウクリアの最高の父よ
リビュアの海が捕らえてユールスへの望みがもう残らぬなら
せめてシカニアの海峡と提供された街へ向かい
そこからここへ来たのだが、アケステスを王としよう」
イリオネウスがこう言い、皆一斉に歓声を上げていたのは
- 560 トロイア人。

その時手短にディードーが眼を下げて言う。

「心から恐れを解け、テウクリア人よ、不安を断て。

厳しい事態と王国の新しさがわたしにこう

企図して歩哨で広く領地を視るのを強いる。

565 誰がアエネーアスの一団を、都市トロイアを

勇気と兵士とあの戦の大火を知るまいか？

そこまで粗暴な心を我らポエ二人は持たず

太陽はティルス都から離れて馬車を繋ぐ。

偉大なるヘスペリアとサトゥルヌスの地を望むにせよ

570 エリュクスの領地と王アケステスを望むにせよ

護衛して無事に送り出して財は援けよう。

あるいはこの王国でわたしと共に定住したいか？

わたしの建てる都は、あなた方らのもの。船を陸上げせよ

トロイア人とティルス人はわたしに区別なく扱われよう。

575 願わくは王アエネーアス自身も風に駆られて同じ所へ

来ていれば！ わたしは浜沿いに頼れる者らを

送ってリビュアの端まで精査するよう命じよう

もし座礁して森や都市を彷徨っていれば」

この言葉に勇気を起こして勇猛なアカテスと

580 父たるアエネーアスは長らく雲を突き破ろうと

燃え上がっていた。先にアエネーアスにアカテスが呼びかける。

「女神の子よ、今心にどんな考えが浮かぶか？

無事な皆と戻って来た船と仲間をあなたは見る。

一人が死んだ、波の中で沈むのを我らは見て

585 他は母の話と一致する」

こう言う間に取り巻く雲が不意に

裂かれて開けた空へ身を散らす。

アエネーアスが立っていて眩い光の中で輝き

顔と肩は神に似ていた。というのも母が手ずから

590 子に優美な豊髪と若さの赤らんだ輝きを

眼に喜ばしい気品を吹き込んでいた。
例えば手が象牙に飾りを加え、あるいは
銀や大理石が黄金色の金で縁取られるかのよう。
それから女王にこう話しかけて皆にとって不意で
595 不測のままに言う。「眼前に、捜す者は、あり
トロイアのアエネーアス、リビュアの波から逃れた。
おお一人でトロイアの恐ろしい労苦を憐れんだ方よ
我ら、ダナイ人からの生還者、陸と海で
あらゆる災禍に絶えず曝され、全てを失った者らへ
600 都市と、家を分けられ、相応の謝恩を尽くすための
力は我らになく、ディードーよ、どこにもいる
広大な世界に散らばったダルダノスの民族の誰にもない。
神々が、もし敬虔者を重んじるなら
もしどこかに正義が、正しさを知る心があれば
605 相応の報酬をもたらすように。あなたをもたらしたのはどれほど
喜ばしい時代か？ どれほどの親がこんな人を生んだのか？
海へ川が流れる限り、山で影が
斜面を通り過ぎる限り、天が星々を養う限り、
常にあなたの栄誉と名声と称賛は続こう
610 どの大地がわたしを呼ぼうとも」こう言って友の
イリオネウスを右手でセレストゥスを左手で
その後他者らを、勇猛なギュアスと勇猛なクロアントゥスを求める。
シドンのディードーは初見の姿に
それから男のこれほどの災禍に呆然とし、こう言い語る。
615 「あなたを、女神の子よ、どんな災禍がこれほどの危機を
追うのか？ どんな力が粗野な岸に寄せ付けるのか？
あなたがあのアエネーアス、ダルダノスのアンキセスのために
恵みのウェヌスがプリュギアのシモイスの水辺で産んだ人か？
わたしが思い出すのはテウクロスがシドンへ来たこと
620 祖国から逃れ、新たな王国を求めていた彼を

ベルスが支援し、父ベルスはその時肥沃な
キプロスを荒らして勝者として支配していた。
既にその時から知るは都市トロイアの災禍と
あなたの名声とペラスゴイ人の王ら。

625 敵たる彼もテウクリア人を高らかに称賛し
自らがテウクリアの古の血統の生まれであればと羨んでいた。
だから、さあ、若者らよ、我らの屋根の下に入れ。
わたしをも似通う運命が数多の労苦を経て
振り回してこの地に住むよう遂に定めた。

630 災いを知らぬのではなく不幸者を救うことは体知している」
こう言い、一方でアエネーアスを王の家へ導き
他方で神殿に犠牲をと宣言する。

その間劣らぬほどに仲間らに浜へ贈るのは
二十頭の牡牛、剛毛を背負う百頭の大豚、
635 母羊を伴う百頭の肥えた子羊、
この日の喜びの贈り物。

対して館の輝く内部は王の贅が
備えられ、館の中心で宴が準備されている。
敷布は技と絢爛な深紅で仕上がり

640 卓上に巨大な銀器があり、金器に彫られたのは
父祖の勇敢な偉業で、事の長大な連なりは
数多の男を経て民族の古き源から引き継がれる。

アエネーアスは父の愛が心を留めるのを許さぬ故
速きアカテスを船へ遣わし

645 アスカニウスにこの件を伝えて城市へ連れて来させる。
愛しい父の全ての情はアスカニウスの中に立在する。
加えてイリオスの廃墟から救い出した贈り物を
運ぶよう命じる、金の刺繍で堅固な長衣を

650 サフラン色のアカンサスで縁取った被り布を
アルゴスのヘレネの衣装、ミュケーナイから

ペルガマへ禁断の結婚のために向かっていた際に
持ち出していた、母レダの素敵な贈り物を
加えて王笏、プリアモスの長女イリオネが
かつて持っていたものを、真珠の首飾りを
655 宝石と黄金の二重の冠を。
急いでアカテスは船へ進路を向けた。
一方キュテラ神が新たな策、新たな計画を
胸で巡らす、姿と口振りを変えたクピードーが
愛しいアスカニウスの代わりに来て、贈り物で
660 女王を熱狂で燃やして骨まで火を絡ませるようにと。
やはりあの家は当てにならずティルス人は二枚舌だと心配し
恐るべきユーノーが焼胸して夜には不安がぶり返す。
故に翼持つアモルに次の言葉で語りかける。
「子よ、我が力よ、我が大権能よ、ただ一人
665 至高の父のテュポンの雷霆を軽んじる子よ
なれへ逃げ込み跪いてなれの権能を求める。
なれの兄弟アエネーアスがいかに海原であらゆる浜の周りへ
無情なユーノーの憎悪のために投げ出されているかを
知って、我が嘆きに幾度も心痛してくれた。
670 今ポエニのディードーが引き留めて甘い言葉で留まらせ
気がかりなのはユーノーによる歓待がどこへ向かうか、
これほどの運命の丁番において無為ではあるまい。
それ故先に計略で女王を捕らえて炎で包囲する
つもりだ、神意で心を変わず
675 アエネーアスへの激しい愛で我に味方させる。
いかにそれを為し得るか、我が心をここに聞け。
王の少年が愛しい父に呼ばれてシドンの都市へ
行こうとしている、我が最も目かける者が
海原とトロイアの炎から残った贈り物を運んでいて
680 彼をわたしは眠りに沈めて高いキュテラの頂か

イダリウムの頂の聖なる住まいに隠し
そうして策を知ったり途中で止めたりはさせぬ。
なれは彼の姿を一夜の間だけ
騙し偽って少年として少年の知られた顔つきを装い
685 なれを懐に歓喜の極みのデューダーが
王の食卓とバックスの水の間で受け入れる時
抱擁を与えて甘い口づけをする時
隠れた火を吹き込んで毒を仕込むこと」
アモルは愛しい母の言葉に従い、翼を
690 外してユールスの足取りで楽しく歩く。
一方ウェヌスはアスカニウスに四肢を通して穏やかな眠りを
灌漑し、懐に抱いた少年を女神はイダリウムの高い
神林へ運び上げ、そこで柔らかなマヨラナが彼を
花々と心地よい影で吹香しながら抱き締める。
695 さて言葉に従って進んでいたクピードーは立派な贈り物を
ティルス人宛にアカテスの案内で嬉々と運んでいた。
着いた時、既に女王は絢爛な壁掛けの中で
黄金の寝台に身を置いて中心を占め
既に父たるアエネーアスとトロイアの若者らが
700 集い、寝台の上で紅布を掛けて横座する。
侍男が手に清水を注いでパンを籠から
供して毛羽を切り揃えた手拭きを持って来る。
五十人の侍女が中にいて、そこで手順よく長い
食事を並べて炎で家庭の神々を崇めるのが務めで
705 別の百人の侍女と同数で同年代の男仕がいて
御馳走で食卓を山盛りして酒を出す。
そしてティルス人も敷居を跨いで喜びに満ちて
集い、鮮やかな寝椅子に横座を命じられた。
驚くはアエネーアスの贈り物、驚くはユールス、
710 神の輝く顔と似せた言葉、

長衣とサフラン色のアカンサスの鮮やかな被り布。
特に不運の、来る破滅が待ち受け
心飽くに能わず見つめては燃え上がる
ポエニの女は、少年にも贈り物にも等しく心動く。
715 彼はその時アエネーアスに抱かれて首にぶら下がり
偽の父の大いなる愛を満たし
女王へ向かう。眼も、心も全て
釘付けで時折懷中で撫でるディードーは知らぬ、
哀れ身に座るは何たる神か。対して彼は
720 アキダリアの母を忘れず徐々にシュカエウスを滅し
始めて活生の愛に
長らく休眠していた魂と無精な心を向けようと試みる。
宴に最初の休息が入って食卓が片付くと
巨大な混酒器が立てられて葡萄酒が彩冠される。
725 館に喧騒が起こって皆は大広間に声を響かせ
煌く灯火は黄金の天井板から吊り下がり
夜を炎で松明が征する。
ここで女王が宝石と黄金で重い酒皿を求めて
原酒で満たし、ベルスと客人の皆が
730 常に使った酒皿で、その時館は静かになった。
「ユピテルよ、客の主人に法を布くと言われる方なれば
この日がティルス人にもトロイアからの訪者らにも喜べるよう
我らの子孫がこの日を忘れぬよう望まれたい。
豊穰与えるバッコスと善良なユーノーが在すように。
735 そしてなれらティルス人よ、快く集いを祝え」
言って食卓へ葡萄酒の供物を捧げ
初めに、口をつけ、口の先だけで触れ
それからビティアスに与えて促し、彼は弛みなく
泡立つ酒皿を飲み空けて潤沢な黄金の中に身を浸し
740 他の重鎮が続いた。長髪のイオパスは

金のキタラを奏す、偉大なるアトラスが教えたもの。

彼は歌う、流浪の月や太陽の苦蝕を

どこから人間の血統と動物が、どこから雨と火が生まれたかを

アルクトゥルスと雨降らしのヒアデスと一対の大熊小熊を

745 なぜ冬の太陽が大洋に身を浸すのをあれほど急ぐかを

またどんな障壁が鈍行の夜に立ち塞がるかを。

ティルス人は喝采を繰り返し、トロイア人が続く。

そして様々な話題で夜を引き延ばし

不運なディードーは長い愛を飲み込んでいた。

750 幾度も尋ねる、プリアモスやヘクトルについての数多を

ある時はアウロラの息子がどんな武具を着けて来たかを

ある時はディオメデスの馬とアキレウスはどれほどだったかを。

「それよりも、さあ客人よ、最初の発端から我らに述べよ。

ダナイ人の謀略とあなたの災禍

755 あなたの流浪を。今や流浪のあなたを七つ目の夏が

あらゆる陸と波の中から運んで来ているのだから」

使用テキスト

Williams, R. Deryck, editor. *Aeneid: Books I-VI*. Bristol Classical P, 1996. (底本。注釈付)

Greenough, J. B., editor. *Bucolics, Aeneid, and Georgics of Vergil*. Ginn, 1900. *Perseus Digital Library*, <https://www.perseus.tufts.edu/hopper/text?doc=Perseus:text:1999.02.0055>. Accessed 3 May 2021. (補助的に参照)

参考文献

1. 『アエネーイス』 翻訳

泉井久之助訳『アエネーイス』上下巻、岩波書店、1976年。(韻文訳)

岡道男・高橋宏幸訳『アエネーイス』京都大学学術出版会、2001年。

杉本正俊訳『アエネーイス』新評論、2013年。

山下太郎訳「『アエネーイス』第一巻訳」山下太郎のラテン語入門、2020年最終更新、
<https://aeneis.jp/?p=8262>。(最終アクセス: 2021年5月7日)

2. ギリシャ・ローマの文学・文化・神話

逸身喜一郎『ギリシャ・ラテン文学——韻文の系譜をたどる 15章』研究社、2018年。

オウィディウス『変身物語』全2冊、高橋宏幸訳、京都大学学術出版会、2019-2020年。

小川正廣『ウェルギリウス『アエネーイス』——神話が語るヨーロッパ世界の原点』岩波書店、2009年。

佐藤信夫[ほか]『レトリック事典』大修館書店、2006年。(西洋古典の用例あり)

丹下和彦『食べるギリシア人——古典文学グルメ紀行』岩波書店、2012年。

古川琢磨「古代・中世ヨーロッパの神話・伝承——現代文化の源泉」Cute.Guides、<https://guides.lib.kyushu-u.ac.jp/europeanmyth>。(最終アクセス: 2021年5月3日)

松原國師『西洋古典学事典』京都大学学術出版会、2010年。

宮城徳也「『アエネーイス』講読」宮城徳也研究室、<https://www.f.waseda.jp/tokuyam/aen.top2.html>。(最終アクセス: 2021年5月7日)

リコッティ、エウジェニア・S・P『古代ローマの饗宴』武谷なおみ訳、講談社、2011年。

Grimal, Pierre. *The Dictionary of Classical Mythology*. Translated by A. R. Maxwell-Hyslop, Blackwell, 1985.

Harrison, S. J. *Generic Enrichment in Vergil and Horace*. Oxford UP, 2011.

Ovid. *Ovid's Metamorphoses, Books 1-5*. Edited with introduction and commentary by William S. Anderson, U of Oklahoma P, 1998. (『変身物語』序盤のテキスト・注釈書)
Parry, Adam. "The Two Voices of Virgil's *Aeneid*." *Virgil: A Collection of Critical Essays*, edited by Steele Commager, Prentice-Hall, 1966, pp. 107-123.

3. ラテン詩読本・ラテン語参考資料

河島思朗『基本から学ぶラテン語』ナツメ社、2016年。(初学者向け)
國原吉之助編著『ラテン詩への誘い』大学書林、2009年。
ゴチェフスキ、ヘルマン『ラテン語の世界』放送大学教育振興会、2016年。(ラテン語概論)
中山恒夫『古典ラテン語文典』白水社、2007年。(文法書)
水谷智洋編『羅和辞典』改訂版、研究社、2009年。
——編『ラテン語図解辞典——古代ローマの文化と風俗』研究社、2013年。
山下太郎『しっかり学ぶ初級ラテン語——文法と練習問題』ベレ出版、2013年。
——「山下太郎のラテン語入門」<https://aeneis.jp/>。(最終アクセス: 2021年5月7日)
Betts, Gavin and Daniel Franklin. *Beginning Latin Poetry Reader*. McGraw-Hill, 2007.
Glare, P. G. W., editor. *Oxford Latin Dictionary*. 2nd ed., Oxford UP, 2012. 2 vols.
Traupman, John C. *The Bantam New College Latin & English Dictionary*. 3rd ed., Bantam, 2007.
Tufts University. *Perseus Digital Library*. <https://www.perseus.tufts.edu/hopper/>.
Accessed 3 May 2021. (ギリシャ・ローマ古典のテキストデータベース)
Wheelock, Frederic M. *Wheelock's Latin*. Revised by Richard A. LaFleur, 7th ed., Collin's Reference, 2011. (英語圏のラテン語教科書)

謝辞

本訳は、九州大学を中心拠点として2016年3月から2018年9月まで開催したラテン語読書会「九羅会」の成果の一部である。堀江卓弘さん(京都大学・西洋古典学)と加藤幹治さん(東京外国語大学・言語学)は九大卒業後もSkypeで参加され、無数の助言をくださった。会の結成時には、浜本裕美先生(九大・西洋古典学)と田島健太郎さん(九大・英文学)から、英語圏のラテン語学習資料の情報を含めて多大なご支援を戴いた。